

7130-19

(2)トツレフン

特273

575

學哲の其とンゲツーイデ

述均川山



會協ルエ・ムエ



始



特273
575

目次

(一) 彼の生涯……………(一)

(二) 彼の爲人……………(三)

(三) 彼の哲學……………(八)

(四) カントの哲學……………(一〇)

(五) カント哲學のブルジョア的性質……………(一三)

(六) 無産階級思想の挑戦……………(一六)

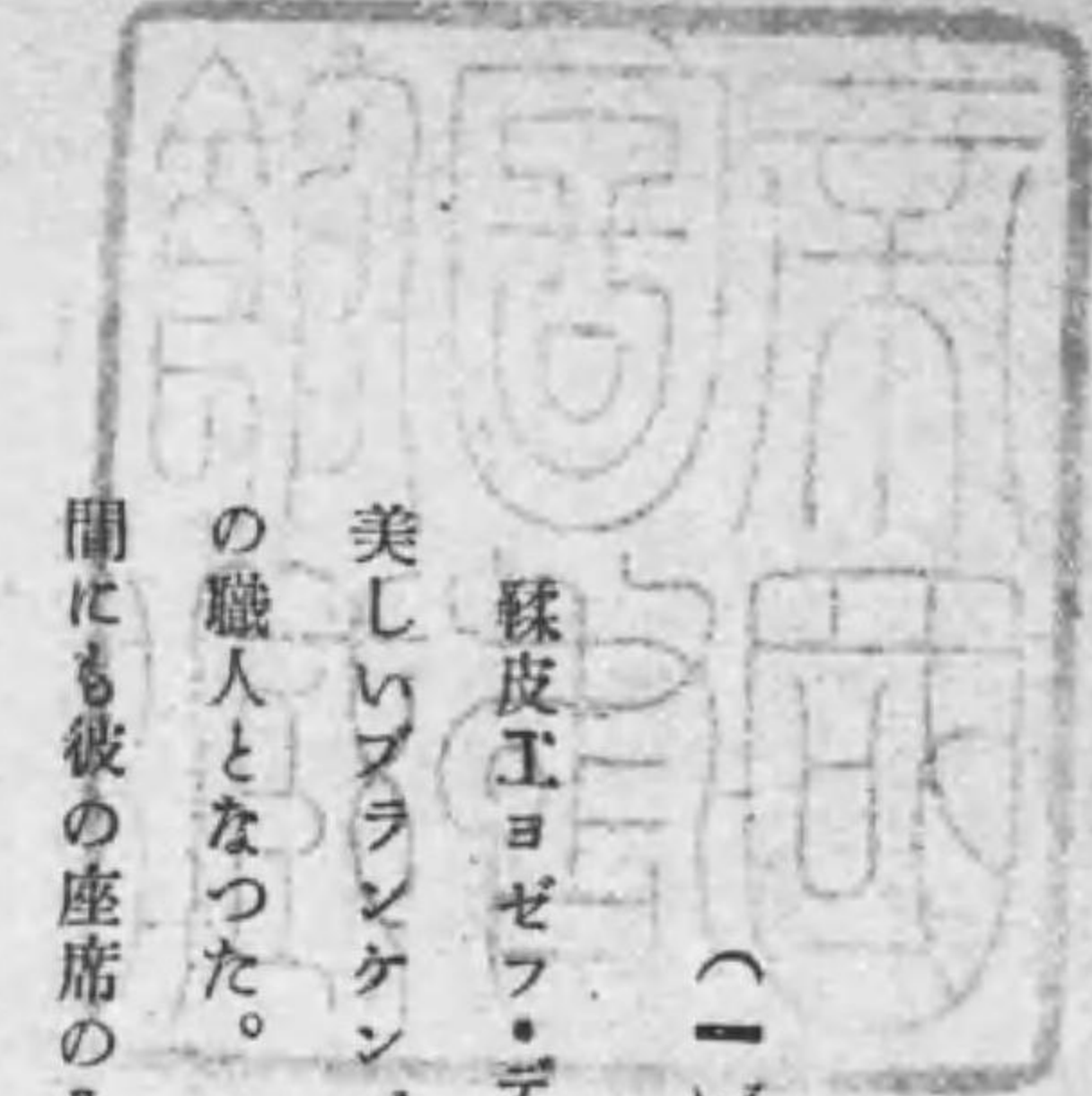
(七) 哲學史上に於ける彼の地位……………(一八)

(八) 彼の哲學とマルクス主義との關係……………(二〇)

ドイツゲンと其の哲學

山川均

(一) 彼の生涯



韃皮工ヨゼフ・ドイツゲンは一八二八年十二月、獨逸のケルン市に近い、ジイグ河の流れる美しいプランケンベルヒに生まれた。ろく／＼高等の教育を受けないで、祖父の革なめし工場の職人となつた。一八四五年から四九年までの間は、彼は祖父の工場に働いてゐたが、仕事の間にも彼の座席のそばには、いつも書物がひろげてあつた。

ドイツゲンは一八四八年の革命運動には加擔したが、翌四九年には反動時代が來たので、六月に米國に亡命した。米國の二ヶ年間、彼はをり／＼韃皮工、ペンキ師、教師などをもしたが、多くは其の日稼ぎの勞働者として、渡り歩るゐてゐた。

15. 2. 27
内交

一八五一年の十二月に、ディーツゲンは獨逸に歸つて、再び祖父の鞣皮工場で働いた。二年の後に、彼は熱心なカトリック教の一信者と結婚し、間もなくウィンタアシャイトに、雜貨店とパン焼所と鞣皮工場とを兼業した。商賣は繁昌して、間もなく近村に支店を出すほどになったが、祖父の工場にゐた時も、之れから後ちの事業の時もそうだつたやうに、この時も矢張り、彼は半日だけ衣食の仕事に費やし、あとの半日は、熱心に學問上の研究に費やした。

一八五九年には、彼は經濟上の獨立を得て、學問上の研究に全力を致したいといふ希望から、再び米國に渡つて、やゝ大きな事業に着手したが、南北戰爭のために失敗に歸したので、六年、露國政府に備はれて、セントペテルスブルグの官營製革所の監督となり、六九年に露國から歸り、郷里に近いジイクブルクに、再び製革所を開いて一八八四年まで續けてゐた。この十五年間に、ディーツゲンは、多くの新聞雜誌に有益な論文を寄稿し、また多くの小冊子をも出版した。

一八七八年、かの有名なヘーデル及びノビリングの獨逸皇帝狙撃騒ぎの時、彼は『社會民主主義の將來』と題する演説筆記を公けにした爲めに、三ヶ月間入獄した。八一年、強ひてライ

プチヒから國會議員の候補者に推されたが、見事に落選した。八四年六月、ディーツゲンは三度び米國に移住し、間もなく創刊せられた社會黨の機關紙『デル・ソチアリスト』の主筆として、紐育に止どまつたが、一八八六年にシカゴに移つた。この年有名なシカゴ無政府黨事件が起り、機關紙『シカゴ・アルバイター・ツァイツング』の幹部も全滅の有様となつた。當時社會黨側では、無政府主義者と一切の關係を斷つこととなつたが、ディーツゲンは『シカゴ・アルバイター・ツァイツング』紙に進んで援助を申出で、暫く同紙の主筆をして居つた。

一八八八年四月十五日、美しい日曜日の朝、彼はその息子の友人を相手に、コヒーを飲みながら熱心に社會問題を論じてゐるうち、俄かに卒倒して息が絶えた。年六十一、遺骸はシカゴ無政府黨殉難者の墓の傍に、極めて質素に葬られた。

(二) 彼の爲人

ジイクブルクの製革工場は、當時しばしばボン大學の教授や學生に訪問せられた。訪問者の一人、博士ブルノ・キールは斯う書いてゐる。

「ディーツゲンの家を尋ねると、川に臨んだ庭園の中程にある、蔦の絡まつた小さいな家を教へられた。水に浸された獣皮と、樫の樹の皮の臭ひとで、直ぐにもはゝあと首肯づかれた。やがて脊の高い可愛らしい娘の案内で這入ると、氣持ちのよい書齋に本がぎつしり詰つてゐる。しかも一目見て、それが唯だの飾りでないことが分かる。そして壁にはペランゼエの肖像が掛かつてゐた。

「間もなく這入つて来て、懇ろに挨拶したディーツゲンを見ると、脊の高い頑丈な男で、髭こそ白いが、その體力氣力ともに五十四歳の人とは思はれぬ。そして一目に天才の面影が讀まれた。其の鋭い眼は、ゲーテの肖像を想ひ出させ、美しい顔は古代希臘哲學者の、從容として迫らざる沈着を示して居り、男らしい中にも、愛すべく親むべき優さしみがこもつてゐる。少し鼻音を帯びてはゐるが、其の聲は金屬を打つやうに響いてゐた。彼は仕事場から歸つたまゝの、シャツ一枚で訪客に接して平氣なところは、「一勞働者の見た人間腦力の性質」といふ、彼の最初の著書の標題そのまゝを、事實にしたやうであつた。

「彼は無造作に仕事場は打つちやらかして、一緒に散歩した。……彼の精神には、仕事場の塵

の影一つだに見えなかつた。どんな哲學者を机の前から立たせても、いま仕事場から出て來たこの革なめし工ほどに氣高くないだらう。のみならずディーツゲンの知識は、大學教育を受けぬ人々を、侮蔑の目で見下だしてゐる尊大な學者を愧ぢしめるに足るものがある……」
彼はまた、日常生活のことには極めて恬淡で、三度目に米國に移住した折にも、荒れ果てた名ばかりの古家に住まふて居り、倒れかゝつた梯子段を、來訪者が怖わ怖わ上り下りするの一向平氣であつた。一八八四年にディーツゲンが友人に送つた手紙には、斯ういふ一節がある。
「……マルクスは精神上の上層建築となるものは、經濟だといふ。この世の中は内面は野蠻でも、矢張り文明風に食ひ、文明風に飲み、文明風に生きようとする。しかし少しの煩累もなしに、上部建築に専心できるやうに私の經濟がなつてさへ居れば、私は野蠻な生活で満足する……」

さりとて彼は、決して禁慾主義者でもなければ、また決して俗世間から超脱しようともしなかつた。

ディーツゲンの職場には、いつも本が開いておかれてゐた。そして何時も半日仕事をして、

あと半日は學術上の研究と社會主義の運動とに費やしてゐた。従つて何時も事業は失敗した。學問に對する彼の愛着と熱心とは、實に驚くべきものがあつた。一八八〇年に、その息子に送つた書翰のうちに、彼は次の如く書いてゐる。

「……青年の頃から、論理上の一問題が始終私の心に付き纏つてゐた。それは即ち「一切の知識の最終の疑問」である。この問題は、岩のやうに私の頭を壓してゐた。過ぐる年月の間、生計上の煩累が急だつた折々には忘れ勝ちに過ぎしたが、それが片付くと又もとの通りになつて、しかも一回ごとに強く且つ明白になり、今では其れを自分の生涯の事業であると思ひ定めるやうになつた。私の心の平和、私の道徳的責任感、私が専心この事業に従事することを要求する。」

6

「そこで私は、私の爲めに經濟上の煩累を分つて呉れる協力者を、絶えず求めてゐる。私が丁抹とゾリンゲンとで、あんな經驗(革なめし工場を計畫したこと)をしたのも同じ譯からだ。何時も私の努力は、營業上の煩累に私の頭を亂されないので、私の問題に精力を傾倒したい爲めだつた。この數年の間は、實に苦しかつた。この問題は床を離れる時から寢る時まで、片

時も私の頭を離れたことはない。しかも生計上の心配は、多くこの問題に心を寄せることを許さなかつたからである……。」

斯くて彼は生計と閑暇とを求めて、露國に往き、亞米利加に漂浪し、幾度びか製革所を開いたり、閉ぢたり、或る時は雜貨店まで始めてみた。

この熱烈な知識の追求者は、家庭に於ては氣のおけぬ、極めて面白い人だつた。彼は決して勿體ぶつた君子の輩でなく、好んで友人や家庭の誰れ彼れを相手に喋舌つたり、好く笑はせたりした。

彼はまた、頗る諧謔に富んでゐた。或る時、懇意な婦人に斯う書いてやつた。

「私の子供たちの間に、私が約束ばかりして一向履行せぬと云ふ苦情を訴へるものがありましても、何卒お取り上げなきやうに。之は子供等が輕々しく物事を信する罪なので、私は彼等の幼少の頃から、私の約束したことは一切信用せぬやうに教へ込んで來たのです。しかし之ばかりは子供の不治の病です……。」

彼の書翰の中には、随分この種の諧謔や洒落が澤山ある。

7

(三) 彼の哲學

デューッゲンの哲學は、マルクスが歴史學の方面に試みた唯物的一元論を、哲學の領域に於いて完成したものだと言はれてゐる。彼の哲學は亦た、著るしくデューッゲン其の人の爲人と一致したところがある。或はデューッゲンの爲人が、彼の哲學の色彩を帯びてゐるとも見られよう。いま彼の哲學を學ぶ葉として、和蘭のマルクス主義の學者、アントン・パンネコックの記述により、デューッゲンの哲學の要點と、哲學上の位置とを略述して見よう。

原始共産時代の社會では、生産の狀況は明白であつて、人間は生産を左右する主人公であると同時に、従つて亦た、自分の運命をも左右する主人であつた。唯だ之を制限するものは自然の不可抗力のみである。斯かる状態の下では、人間の思想は勢ひ單純明白なものだつた。其處には個人と社會との利害の衝突がない。従つて善と惡との觀念は、今日の如く著しい對立をしてはゐなかつた。そして唯だ不可抗力のみが、一種測るべからざる神祕の力と思はれてゐた。

ところが、文明の進歩は、自然力といふ怪物の手から人間を救ひ出したが、それと同時に新しい怪物は、今度は社會的境遇から飛び出して來た。人間が消費を目的としないで、交換を目的として生産するやうになると、彼は全く、自分の生産物を左右する力を失つた。生産物が一度び交換の爲めに、生産者の手を放れると同時に、最早や、その生産物がどう成り行くかは、元の生産者には分らない。或はその生産物が、やがて元の生産者を掠奪し、壓制するの用に供せられるかも知れぬ。そして今度は生産物が、却つて生産者を支配し、生産者の運命を左右することになる。

斯うなると、生産は生産者の社會的協力の結果であるといふ事實は、相互の猛烈な競争の蔭に蔽はれてしまひ、その蔭に隠れて、少數者が多數者の勞力の結果を享有し、茲に社會の利害と個人の利害とが初めて衝突する。従つて善と惡とが對立する。

斯かる印象の裡に、多くの哲學者は其の哲學を編み出したものである。しかも是等の哲學者の多くは、財産階級に屬する人々であつて、社會的な勞働道程そのものとは全く没交渉だつたので、従つて彼等自身の思想の淵源をも、悟ることが出来なかつた。

そこで此の階級に屬する人々は、自分の思想は、何等かの超自然的な精神上の力から發生したるものか、それとも彼等自身が、獨立自由な或る超自然的の力を持つて居るかの如く速断した。この二元的な形而上學的の考へ方は、時と共に色々の形に變化して、其の時々の生産方法の變化に迎合した。即ち太古の奴隸制度から、中世の農奴制度と幼稚な手工業、近世の資本制度に至る生産方法の變遷は、以上の各時代を代表する希臘哲學と基督教と近世哲學との中に、各々體現せられてゐる。形は色々に變つたが、是等の思想を一貫した特徴は、二元論である。即ち思想と實在との間、自然と心靈との間、善と惡との間の峻別であつて、畢竟、彼等が宇宙の事物を、眞實ありの儘なる相互關係の姿で觀取し得なかつた爲である。そして斯かる心理状態は、人類社會が階級に分裂し、従つて社會的生產の性質が理解されなくなつた事實を反映したものに外ならぬ。

(四) カントの哲學

カントの哲學も、矢張り其の時代の特徴を表現したものであつた。カントによれば、經驗と

科學とは、外界の印象が基礎となつてゐると同時に、吾々人間の心の成立ちに固有本來な性質が、その基礎となつて居る。例へば吾々人間の心には、時間と空間、原因と結果といふやうな範疇がある。そして此の範疇に當て箝めて、吾々は初めて外界を理解し經驗するものである。従つて吾々の理解し經驗する事柄は、心の固有本來の性質に従つて理解し經驗するのであつて、外界の事物をその有りの儘にて理解し經驗するものではない。即ち「物それ自體」は、全く人間の理知以外、知識以外の境地にあるもので、知覺によつても推理によつても、全く描出し難いものである。

カントは以上の考察を、主として次の疑問に答へる爲めに用ひた。即ち經驗を超越した知識の價値は如何、吾々は經驗を超越した概念の演繹的推論によつて、眞理に達し得るかどうか、といふ疑問である。カントは之に對して否と答へて、主知主義に一大打撃を與へてゐる。吾々は經驗といふ境界線から一步も踏み出すことは出来ぬ。そして經驗によつてのみ、科學的知識は成立つことが出来る。そして無限絶對に關する知識、純粹理知に就いての知識、靈魂、世界、神といふやうな、カントの謂ゆるイデアに關する知識は、實は知識ではなくて幻影に過ぎない

ものである。

そこでカントは、絶對者超自然者に對する、否定をも肯定をも、同時に論破したものである。従つてそれは、主知主義に對する打撃であると同時に、佛蘭西の急進的思想家を支配して居つたブルジョア唯物論にも、致命的の打撃を與へたものである。

斯やうにカントは、信仰や直觀の働くべき分野を明かにはしたが、信仰や直觀を、全く驅逐し去ることはしなかつたのである。即ちカントに従へば、神、自由、不死等の概念は、理知によつて證明し得ぬものであるが、理知によつて證明せられぬといふことは、それ等のものが實在することを毫しも妨げぬ。例へば日常の經驗は、人間が自然力に依屬して居つて、毫も自由の無い事を教へるにも拘はらず、苟も義務の感じがあり、又たこの感じに従つて行動し得ると信する人々は、勢ひ意志の自由を確信するに相違ない。であるから意志は、經驗上の證據を待たないで、絶對的に無條件的に確實なものである、と。

意志が自由であるとしたならば、自由の意志は抑々どんな境地に働くものであらうか。全世界の現象は、人間の心の成立ちそのものが要求して居る通り、確實に原因結果の法則に支配さ

れてゐる者である。従つて現象界には、自由意志の働くべき餘地はない。カントはそこで、自由意志の働く場所を、『物それ自體』に求めたのである。『物それ自體』は、現象界のやうに空間、時間、その他の範疇に制約せられぬ自由の境地である。即ち『物それ自體』は、現象界に對立して第二の世界、實體界を形成するものであつて、吾々の理知によつて認識せられる現象界の背後にあるものである。

斯やうにカントは、現象界と實體界とを對立させて、人間が自然力に依屬してゐる事實と、意志は自由なりといふ自覺との矛盾を調和しやうとした。靈魂の不滅や、神の存在等の觀念を、カントは之と同じ道行きで確認したのである。

(五) カント哲學のブルジョア的性質

カントの推論は、誠によく其の時代の經濟的發展と、科學の狀態とに一致して居つた。當時、自然界の事柄は、唯物論的の經驗と觀察とを基礎とする歸納法的研究方法に一任せられてゐた。即ち自然科學の領分からは、信仰は全く驅逐せられてゐたのである。けれども尙ほ其他の

領分には、信仰は依然として有力であつた。時代は尙ほ、唯物論的の道德観、倫理観を許さなかつたのである。

カントの哲學は、かゝるブルジョア思想の表現であつて、殊にカントの哲學體系が、自由を中心として築かれてゐることは、ます／＼此の事實を著るしくするものである。新興の資本制度は其の生産力を擴大する爲めに、商品の生産者に自由を與へることを第一の必要とした。資本制度はまた競争の自由、無制限搾取の自由を必要とした。茲に於いてか自由の一語は、政權を渴望するブルジョアの合言葉となつて、來るべき佛蘭西革命を激成しつゝあつた。そして自由意志を以つて倫理學上の基礎とするカントの哲學は、まさに近づきつゝある佛蘭西革命の反響だつたのである。

けれども其の自由は、絶對の自由ではなかつた。自由は道德に當て箴つたものでなければならなかつた。何故ならば、ブルジョア社會の存続には各個人の幸福が、ブルジョア階級といふ全階級の幸福に従屬する必要がある。そしてそれが爲めには、ブルジョア階級の命令は即ち道德と認められ、この道德の前には、個人の幸福の追求をも犠牲としなければならなかつたのである。

けれども此の同じ理由の爲に、道德は曾て完全に遵奉せられたことがない。各人は自己の利益を追求すれば、勢ひ道德の蹂躪を餘儀なくされる。かくて道德は、未だ曾て完全に遵奉せられたことの無い法典である。道德は即ち、經驗の領分以外にある。

ブルジョア社會の内部にある斯やうな矛盾は、カントの倫理學のうちに反映せられてゐる。そして、此の矛盾の根源は、前にも述べたやうに、生産が社會的性質と個人的性質とを併せて有するやうになり、この兩つの性質の對立から生じた矛盾である。そしてこの矛盾が、やがて人間の運命を支配する全能の、しかも意識されない、社會的勢力の源泉となつてゐる。この二元の對立は、更に貧富の對立によつて、一層甚しくなつてゐる。そして貧富の階級的矛盾はまた、人間の欲求と、それによつて得られる結果との間の矛盾、幸福の欲求と多數民衆の悲慘との間の矛盾となる。そして生産組織に含まれてゐる矛盾は、やがて善徳と悪行、自由と隷屬、信仰と科學、現象と『物それ自體』との對立矛盾の基礎となる。そしてこの矛盾はまた、カント哲學の一切の矛盾、一切の明白な二元論の根柢を爲すのである。

(六) 無産階級思想の挑戦

十九世紀の半ばとなつて、初めて無産階級の思想家が、カントの謂ゆる「實踐理性」の學說に挑戦した。何故ならばカントの倫理と自由とは、ブルジョアに取つては搾取の自由となり、労働階級に取つては奴隸の倫理となつて現はれたからである。斯くてカントの嚴肅な倫理學も、人間の活動を一貫した永久的の基礎を啓示するものではなくて、畢竟、狭い階級的利害の反映に過ぎないものであつたからである。

社會的階級とは何かと云へば、社會的生産の過程のうちに、人々が各々異つた位置に屬するといふ事である。従つて各階級は、互ひに矛盾した經濟上の利害を持つてゐる。そして又各々の階級は、各々自己階級の利益を以つて善であり、神聖であると考へてゐる。即ち階級的利害は、經濟上の利害といふ本來の儘なる性質では自覺されないで、善惡といふ道德的根據の衣裳を着けて人々の目に映するものである。そして其の根柢となつてゐる生産組織の意義と性質とが理解されて居らぬので、人間を動かしてゐる動機の起原を發見することが出来なかつた。そ

こで人々は、是等の動機の起原を經驗のうちに求めないで、唯だ直接に、直觀的に感じるばかりであつた。斯くて從來の哲學は、道德的の動機を超自然的の起原に歸し、永久不變に存在するものゝ如くに考へたのである。

道德ばかりでなく、宗教、科學、哲學等の如き人間の精神的產物は、悉く其の社會の物質的條件と密接な關係がある。人間の精神上的の產物は、有ゆる外界の影響を蒙つてゐる。即ち人間の心も亦た自然の一部であつて、従つてまた人間の心を研究題目とする科學も、一個の自然科學と爲し得ることが明かになつた。抑々、人間の經驗を決定するものは、外界から受ける印象である。そして此の經驗から生じた人間の欲求が、彼れの意志を形成する。そして彼れの一般的の欲求が、即ち彼れの道德的意志である。斯やうに人間を圍繞する世界は、人間に印象と欲求とを與へる。そしてこの印象と欲求とが、人間に意志と行動を與へ、その意志と活動によつて、人間は逆さまに世界を變へてゆく。また意志の指導によつて起る行動は、社會的生産の過程の中に現はれる。こんな風に、人間は其の行動によつて、自然と社會との進化發達といふ、大きな鎖の一環をなすものである。

(七) 哲學史上に於ける彼の地位

この思想は、從來の哲學を根柢から革命した。即ち人間の精神そのものが、今や自然の一部分となり、一定の法則によつて、世界の自餘の部分と互ひに相ひ影響するものとなつて來たのである。従つて最早や、實體界などいふものを立てる必要がない。最早や吾々に取つては、現象を外にしては、別に實體なるものは存在せぬ。茲に於いてか哲學は經驗の學理となり、人間の心を主題とする一個の科學となつた。

カントは常に、心と自然とを峻別した。けれども此の區別は、研究の便利の爲にするほんの一時の手段であること、物質と心との間には、絶對的の相異の無いことを悟るに至つて、初めて人間の思想方法を研究する科學(即ち哲學)は進歩したのである。そしてそれは唯だ、資本主義的生産組織の性質を明かに觀取した無産階級の思想家によつてのみ、初めて完成せらるべき事業であつた。

ヨゼフ・ディーツゲンの『人間の腦力の性質』は、實にこの問題を解決したものであつて、彼

れはこの最初の著書によつて、無産階級の哲學者たる名を博したのである。

けれどもディーツゲンをして、能くこの問題を解決せしめたのは、辨證法^{ダイアレクティクス}である。カントからヘーゲルに至る間の唯心哲學のもろくの體系は、主として辨證法の發展である。従つて是等の哲學體系はディーツゲンの無産階級哲學の準備となり、先驅となつたものである。

斯くて新しい世界哲學は、古いブルジョアの哲學の裡から自づと流れ出た。けれども此の新しい思想は、哲學となる前に、先づ新しい社會觀となつて、ブルジョアの社會觀に對立した。即ちマルクスは、社會學上から、史學上から、この新しい社會觀を發達させた。そして、今やディーツゲンによつて、この新思想は、哲學的の基礎を置かれたのである。

斯やうに社會學上並に史學上からと、哲學上とから發達して來た、この無産階級の新思想の特質は、第一には、唯物論的なことである。即ち獨逸哲學の全盛期に行はれた唯心論的の哲學が、心を以つて全ての存在物の基礎としたのに對立して、この思想は物質的存在物を基礎とする。それと同時に、この思想はまた、從來のブルジョアの唯物論にも反對する。更に詳しく云へば、この思想に従へば、物質とは、人間の思惟の材料となるべき一切の存在物であつて、人間の思

想と想像の如きものも、亦た其の中に含まれる。即ち一切の存在物の一律といふことが、其の思想の基礎となつてゐる。この思想によつて、人間の心は、自他一切のものと、宇宙の間に平等の位地を占めるものとなつた。人間の心以外の、自餘一切の宇宙の事物が、互ひに密接に關係連續して居るやうに、人間の心も宇宙の一部分として、是等のものと密接に關係連續したものである。従つて人間の心の内容は、勢ひ宇宙の自餘の部分によつて成立つものである。そこで此の新しい哲學は、唯物史觀に初めて哲學上の論據を與へたものである。

無産階級の歴史觀が、階級的抑壓から人間の生活を解放するやうに、一革なめし工の無産階級哲學は、人間の心を一切の迷信、一切の二元論から解放する。デューツゲンの無産階級的一元哲學は、ヒューム、カントの完成であつて、哲學の實際上の成果であると同時に、また人心の解放を意味するものである。

(八) 彼の哲學とマルクス主義との關係

ペンネコックは、マルクス主義とデューツゲンの哲學との關係を約言して斯う云つてゐる。

「マルクスは、生産の社會的過程の性質と、その社會的發達の動力としての、根本的の意味を闡明した。けれども彼は、人間の心の性質が、如何なる方法によつて、この物質的過程のうちに含まれて居るかを、充分に説明しなかつた。このマルクス説の弱點こそ、ブルジョア思想の傳統的の大勢力の結果として、マルクス説が完全に理解されなかつたり、又は誤解せられる、主なる理由の一つとなつて居る。マルクス説の斯やうな短所は、人間の心の性質を研究題目としたデューツゲンによつて救はれた。右の如き理由により、デューツゲンの哲學上の著述を充分に研究することは、マルクス及びエンゲルスの根本的著述を理解する爲に、缺くべからざる重要な助けである。デューツゲンの著述は、無産階級は無産階級經濟學といふ有力な武器をもつてゐるばかりでなく、無産階級哲學といふ、強大な武器を有することを證據立てるものである……。」

エンゲルスも亦たデューツゲンの功績について、「フイエエルバッハ論」のうちに、「……吾々の最善の道具であり最も鋭利な武器たる唯物的辨證法は、吾々ばかりでなく、獨逸の一勞働者ヨゼフ・デューツゲンによつて、立派に、且つ全然吾々とは獨立して發見せられた。」と云つて

ゐる。マルクスも曾て、ジイクブルクの製革工場にディーツゲンを訪問したことがあるが、『資本論』第一巻の序文のうちに、ディーツゲンの経済學上の識見を賞讃してゐるし、一八七二年のヘーグに於ける萬國労働者協會の大會では、ディーツゲンを『吾々の哲學者』として議場に紹介したことがある。

ディーツゲンが初めて其の一元的無産階級哲學を發表したのは、一八六九年、露都滞在在中に成つた『一労働者の見たる、人間の脳髓の働きの性質』である。一八八六年シカゴに於て、第二の著書『一社會主義者の、知識論界への遍歴』を著はし、翌年また『哲學の實果』を公けにした。この最後の著述のうちに、彼れ思想は最も明白に、最も成熟した形で現はれてゐると云はれて居る。

一八八〇年から八四年にかけて、彼は息子のオイゲン・ディーツゲンに宛てて、二種の連続した書翰を書いた。其の一つは經濟學に關するもの、今一つは論理學に關するもので、『哲學の實果』と同一の問題を取扱つたものであるが、彼は後年、この書翰に代へる爲に『哲學の實果』を著はした。獨逸文では以上の著述の外、論文及び書翰を集めた全集が公刊せられてゐる。英

譯には『人間の脳髓の働きの性質』と『論理學に關する書翰』と『哲學の實果』とを收めた『哲學の實果』と、『一社會主義者の知識論界への遍歴』及びその他の論文を集めた『哲學論集』とがある。

尙ほディーツゲンの哲學上の著述は、一般の哲學者とは大いに勝手が違ひ、彼れ自らも、何處が初まりで何處が終りと云ふこともなく、何處から読み始めても、何處を抜き読みして貰つても差支ないと云つて居る。

——『無産階級の哲學』(ディーツゲン著、山川均譯)に與へし譯者の緒言より——

297
256

◇ 發行者の言葉 ◇

『エム・エル協會パンフレット』は、社會運動の一闘卒たる僕の貧弱な務めの一つであり、飯の種である。出来ることなら、毎月一冊、又は二冊、繼續して發行したいと思つてゐるが、固より無一文でやるのだから、今の所、果して豫定どほりに行くかどうかは分らない。
だが、これを何十冊か、何百冊、世に出すことが出来て、日本の社會主義運動に幾らか貢献する所があつたなら、其の時、死んだつて大した憾みを感じないだけの量見は持つてやつて行く積りだ。
従つて、本パンフレットに收める所は、反譯にせよ、述作にせよ、又た執筆者の誰たるにか、はらず、全責任は僕一人で負擔する覺悟である。

一九二五年一月

藤岡淳吉

◇ エム・エル協會パンフレット ◇

- (一) レーニン 資本制度から共産制度へ 一〇
- (二) 山川 均 デイーツゲンと其の哲學 一〇
- (三) シノビエフ ロシヤ共産黨小史 一〇
- (四) ルクセンブ ールグ マルクス主義の立場 近刊
- (五) 藤岡淳吉 國家論批判 近刊
- (六) レーニン 社會主義と民族問題 近刊
- (七) 北原龍雄 階級と政治 近刊
- (八) ルナチャル スキー 勞農露西亞の國民教育 近刊
- (九) トロツキー 赤軍の建設 近刊

◇ 取次パンフレット目次 ◇

- 堺利彦 社會主義大意 一〇
- マルクス 勞働と資本 一五
- パンネコック 社會主義と進化論 二〇
- マルクス 利潤の出處 二〇
- 堺利彦 社會主義學說大要 三〇
- マルクス ゴタ綱領批評 二〇
- 堺利彦 バリ・コンミュンの話 二〇
- 山川均 資本主義のからくり 三〇
- 北原龍雄 常識の社會主義 五〇

物價騰貴の際ですから十部以下の割引は御断りいたしますが、十部以上百部までは二割引百部以上は三割引にいたします。但し、代金は一切前拂ひのこと。

エム・エル協會

大正十五年二月十七日印刷
大正十五年二月二十日發行

【定價十錢】

編輯發行人 藤岡淳吉

印刷所 東京市京橋區木挽町一ノ十一
地涌學會印刷所

發行所 東京市外大井町山中四一九二番
振替東京 工ム・エル協會

終